

稲作情報 1 号

高品質米生産を目指した平成 26 年産水稻の栽培について

1 平成 25 年産水稻の収量と品質の概況

(1) 1 等米比率の概況

- ・全国の 1 等米比率は 79.4%，東北地域は 93.0%，本県の 1 等米比率は 93.5% で過去 10 ヶ年平均値 (81.5%) を上回った
- ・主要品種別の 1 等米比率は。「ひとめぼれ」が 95.1%，「ササニシキ」が 86.2%，「まなむすめ」が 91.4%，「つや姫」が 92.8%，「コシヒカリ」が 86.7% であった。

(2) 気象経過

- ・出穂 25 日前に気温，日照時間とも平均を下回る日が連続して発生し玄米千粒重が小さいものの収量・品質への影響はほとんどなかった。
- ・出穂期(8/6) 後の約 20 日間は，平年を上回る気温で経過し，日較差が大きく，日照時間が多かった。21 日～35 日は平年よりやや低く経過したが，36 日以降は高めに経過した。

(3) 収量

- ・籾殻重は平年より小さく，玄米の千粒重も小さく，粒厚・粒幅が全体的に小さかった
- ・籾殻の発育時期が低温寡照に経過したことから，籾殻は小さく，玄米の肥大が抑制されたと考えられる。
- ・ m^2 当たり籾数と精玄米重の関係は，適正籾数範囲 (28～30 千粒/ m^2) を超えると精玄米重が減少する平年に近い関係となったが，平年と比較して収量が低下する籾数レベルがやや少なかった。これに対し前年は，適正籾数以上となっても精玄米重が増加傾向であった。
- ・平年と比較すると，本年は登熟前半が多照に経過し，その後平年並～やや少なくなり，前年は登熟の後半まで多照で弱勢籾の登熟が進んだことが要因と考えられた。

(4) 品質

- ・出穂後 20 日間の日平均気温は，全般に平年より高めに経過した。出穂期間 (始期 8/3～終期 8/14) は平年よりかなり高く経過し，特に 8/7 頃までは白未熟粒の

多かった過去2年と比較しても高く経過した

・出穂後20日間の日平均日照時間は、8/15頃まで平年より多く経過し、特に8/12までは白未熟粒の多かった過去2年と比較しても多く経過した。

・出穂後20日間の日平均日格差は、日照時間同様に8/15頃まで平年より多く経過し、特に8/12までは白未熟粒の多かった過去2年と比較しても多く経過した。

・穂揃い期以降の乾物重増加と穂への転流は、平年より穂/茎葉重比が高く、良好に転流したとみられた。

・適正籾数の「ひとめぼれ」は補揃い期葉色と白未熟粒比に負の相関が認められた。平成24年度比較し、葉色が低い場合でも白未熟粒の発生が少なかった。

・出穂15日後から5日ごとの登熟状況は、出穂25日頃に整粒が80%以上を越し、平年より非常に高い状況であった。

・本年の高品質要因として、高温多照により光合成が旺盛となり、玄米重の伸長と粒重の増加速度が高まり、同化産物の生産が円滑に行われ整粒歩合が高くなったと考えられる。さらに、日較差が大きいことが稲体の夜間における呼吸消費の抑制や、同化産物の転流を促進させたと考えられる。

2 平成26年度の稲作について

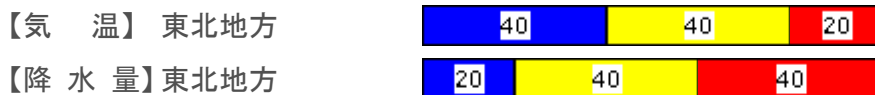
(1) 東北地方 暖候期予報 (3月～8月までの天候見通し) 仙台管区气象台

◇6月～7月は平年と同様に曇りや雨の日が多く、平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

◇平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。

◇降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

<夏(6月～8月)の気温、降水量の各階級の確率(%)>



凡例:  低い(少ない)  平年並  高い(多い)

(2) 東北地方3か月予報(4月～6月までの天候見通し)

◇4月 東北日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

◇5月 天気は数日の周期で変わるでしょう。

◇6月 前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。

※6月から8月までの夏の期間は南米のペルー沖で海水温度が高くなるエルニーニョ現象が5年ぶりに発生する可能性があり、北日本を中心に太平洋高気圧の張り出しが弱くなり、北日本で低温となる可能性がある。

3 高品質米生産を目指した栽培管理

(1) 生育目標①ひとめぼれ②ササニシキ

(2) 良質米生産の技術的対応

① 土づくり等

・良質な堆肥や土づくり肥料を施用し、気象変動に強い土作りに努める

② 移植時期

・早期移植は過剰分けつとなり易いので、5月20日頃を目安とし、有効茎歩合を高める。そのため、播種時期は4月下旬とする。

③ 栽植密度

・地力に応じた栽植密度と適正な植え付け本数とし、過度な密植は避ける。なお、植え付け本数は、4本を基本とする。

④ 肥培管理

・本県の落等原因は、充実度不足が主な要因となっているが、生育後半の栄養不足が原因ではないかと思われる。

・そのため、肥効の持続する肥効調節型の肥料や適切な生育診断に基づいた確実な追肥を実行する必要がある。

⑤ 水管理

・今年の夏は、低温も予想されることから、異常気象時には、深水管理の徹底が最も重要である。

・出穂後の高温時には、午前中に入水し、夕方に落水するなどの対策をとり、できるだけ温度を下げ、白未熟粒等による品質低下を防ぐことが重要である。

⑥ 落水と適期刈り取り

・早期落水は、乳白粒の発生等による品質低下の原因となるため、落水時期は、出穂後30～35日後とする。

・刈り取りは、積算平均気温を参考にして熟色等を見ながら、天候を考慮した作業計画を立てて、刈り遅れないように留意する。